

生きた文法を捉える:

携帯メールコミュニケーションに見る慣習と秩序の創発

吉川正人 (慶應義塾大学大学院/日本学術振興会特別研究員)・

久保田ひろい (千葉大学大学院/日本学術振興会特別研究員)

**Diving into the dynamics of grammars:**

**Investigating how conventions emerge in cell-phone text-messaging**

**Masato YOSHIKAWA (Keio University/JSPS Research Fellow),**

**Hiroi KUBOTA (Chiba University/JSPS Research Fellow)**

Abstract

Nowadays, with the spread of cell-phones, cell-phone text-messaging (CT) becomes one of the major media for communication. It is reported that the language employed in CT has a number of unique characteristics, but, if so, there arises a question: Where does it come from?

In this paper, we present a rather innovative view of grammar which regards it as a kind of social convention, inspired by the “language as a complex adaptive system” view (Beckner et al. 2009). Under this view, the answer for the above raised question is provided as follows: language employed in CT has “emerged” from communication on CT, as a set of shared conventions.

## 1. はじめに

昨今, 携帯電話の普及に伴い, 携帯電話を利用した E メールによるコミュニケーション (以下 CCT (= Communication on Cell-phone Text-messaging)) が一つの重要なコミュニケーションメディアとなってきた。その特性は複数の研究によって指摘されている (e.g., 三宅 2005; 太田 2001) が, それが新しいコミュニケーションメディアである以上, 「その特性はどこから来たのか?」と問うことには重要な意義がある。本稿ではこのような問題意識から, 慣習としての「文法」の創発という観点 (Cf. Hopper 1998) から CCT の姿を見つめ直し, 特に CCT に特有な「絵文字」の用法に着目することで, 「豊かな多様性と慣習との共存」という実態を提示し, その成立要因を考察する。

## 2. 背景

理論言語学では, 文法は規則や原理の体系と看做され, その所在や源泉は生得的な機構・知識や認知の仕組みに還元されることが多い。しかし, 言語を, 話者というエージェントが複雑に結びついたネットワークからなるシステム, つまり, 複雑適応系である, と看做す (e.g., Beckner et al. 2009) ならば, 言語学者が記述・分析してきた「文法」とは, 「個」の中には存在しない, 社会・文化的な「慣習」もしくは「制度」の体系である可能性がある (Cf. Port 2010)。これは (マクロ) 社会言語学や文化/言語人類学 (e.g., Enfield 2002) の通説にも通じる, 妥当性を見込める想定である。このような想定は, 以下の含意を持つ (吉川 2010):

- (1) a. 文法は多層的であり, 慣習の成立する集団や状況に依存する;
- b. 話者は発話の場面に応じた慣習 (= 文法) を選択している;
- c. 共有された慣習に従うことはコミュニケーションの成功を保証する;

d. c より、慣習に従うべく働く「社会的圧力」が話者の言語行動を制約している。

### 3. 「携帯メール文法」はどこから来たのか

CCT で用いられる言語の特徴は、書き言葉でありながら、助詞の欠如や言いさしの多用、俗語や方言の使用など、非常に「話し言葉的」な性質を持っているという点にある(太田 2001)。ここから、「携帯メール文法」、つまり、CCT で用いられる言語の諸性質は、話し言葉からの転用であるとみなせるかもしれない。

しかし実際は、古語や幼児語、自身の出身地方のものでは無い方言の使用など、日常会話では見られない諸性質を CCT における言語に見出すことができる(三宅 2005)。中でも特に着目すべきは、頻出する「絵文字」の使用である。「絵文字」は話し言葉にはない。<sup>1)</sup> もちろん絵文字はサービスとして提供されて初めて利用できるツールであり、ユーザーの意思で自発的に使用が開始されたものではない。しかしながら、絵文字は使われなくてもいいのに使われているのであり、またその使用目的や使用方法がマニュアルにそって教授されたものではないという点で、実際の CCT において絵文字がどのように使われているのかというのは「ことばの運用パターン」≈「文法」の研究の対象として扱うに値する。以下では、このような観点から、絵文字の使用に着目し CCT の実態を提示し、その成立要因を探る。

#### 3.1. CCT の実態調査からみる絵文字の機能

第 2 著者による CCT の実態調査(久保田 2009)から、絵文字の使用は 1) 「あいさつ」や「感謝」など、定型化された発話との共起が顕著であり、2) メールによる会話の「終了」部に多用される、ということが明らかになっている(Table. 1 参照)。このような絵文字の振る舞いは、絵文字が発話行為(Searle 1970)や会話の構造と結び付いたコミュニケーション上の機能を果たしているということを強く示唆する(Cf. 久保田・石崎 2009)。

Table. 1 発話機能による絵文字分類

発話機能	文数	絵文字との共起率	絵文字数/文数
報告	437	0.71	1.35
質問	173	0.51	1.36
要求	95	0.79	1.41
提案	95	0.78	1.43
応答	218	0.83	1.36
相槌	234	0.77	1.29
挨拶	97	0.96	1.53
呼びかけ	38	0.79	1.36
感謝	64	0.89	1.71
謝罪	41	0.70	1.24

<sup>1)</sup> もちろん携帯メールユーザーがみな絵文字を使用しているわけではない。

### 3.2. 「携帯メール文法」の成立要因

CCT は、基本的に二者間で行われるという点で、「最小限の公共性」しか持たない、非常に「私的」なコミュニケーションメディアであると言える。従って、上記(1d)より、スタイルの多様性が帰結される。慣習の成立がランダムな言語使用から始まり徐々に淘汰を経て収束していくプロセスだとすれば、慣習化が乏しくまたその必要性が低い状況では、更なる慣習化がほとんど起きず非常に流動的なスタイルが現れる。基本的に携帯メール文法の実態はこのような流動的なスタイルとして特徴づけられよう。

しかし絵文字の使用には、完全にランダムではない「慣習」の存在を見て取ることができる。絵文字の使用は基本的には非常に個人的であり一貫性に乏しいが、先に見たように、ある種の発話行為/機能(e.g., あいさつ, 感謝)との対応に関しては一貫性・体系性が見てとれる。これは明らかに共有された「慣習」である。

慣習の成立には「理由」が存在するが、そうである必然性は持たない。現存する絵文字使用の慣習は、絵文字使用者の間で CCT において有効に働くと意識的・無意識的に認められ、ある種の「淘汰」を経て生き残ったものであると考えられる。この点で、絵文字が特徴的に共起していたのが「あいさつ」や「感謝」という、非常に定型化された発話行為であることも重要である。恐らく実態は、発話行為それ自体というよりも、それを担う定型表現(e.g., ありがとう, こんにちは)と絵文字との共起という具体的な表現パターンの使用が慣習化したものであると考えられる。これは Baxter ら(Baxter et al. 2006)による「発話淘汰モデル」によって説明可能な、方言やスタイル形成のプロセスと同一の展開である。


### 3.3. 2種類の絵文字用法の存在

このような観点から、絵文字の使用には、少なくとも二種類の用法が存在しているという可能性が指摘できる: ランダムで非慣習的な「装飾」的用法と慣習的な「発話機能」を担った用法である。実際のメールデータからはその中間段階の、特定の総受信者のみに共有された、言わばローカルルールのような局所的な慣習としての絵文字用法を見て取ることもできる。

例えば、前述の調査で得られたデータの中に(2)のように指示的な意味や感情表現などの意図を読み取りにくいペンギンの絵文字(🐧)が多用される例があった(以下は全て同一利用者による「発話」):

- (2) a. ... 08 会は中止にしようと思います🐧
- b. I に連絡お願いしてもよい🐧??
- c. りょーかいしました🐧

これは恐らくメール送信者がある種の「キャラ語尾」(金水 2003)として絵文字を使用している例である。重要なのは、メールのやり取りの展開を見て初めてそのような用法であることを推察できるのであって、何の前提も無しに唐突に文末に「🐧」が付与されていてその意図を読み取ることは難しいということである。言い換えれば、この利用

者が自身のキャラクター表現として文末にを用いるということが、少なくとも(2)のメール文の受信者との間では共有されているということである。

現在確立している上述の絵文字用法も、このようなローカルな用法が徐々に共有され慣習化することによって成立したと考えられる。<sup>2)</sup>

#### 4. 結語

本稿では、携帯メールという「新しい」メディア上で展開される言語の姿を見つめることで、「文法はどこから来るのか」という問題を「社会慣習としての文法」という観点から捉えることを試みた。

ただし今回本稿で提示した分析は「実証」のレベルには達しておらず、「可能な道筋の存在」を示唆したに過ぎない。しかしながら、「文法とは何か? どこからやってきたのか?」という問題は、既に確立した文法の姿を見ている用意には解明し難い問題であり、CCTのような「発展途上」の言語使用パターンを見ることがその解明に繋がるという可能性を提示した点に、本研究の意義を見いだせる。

従って今後は、詳細かつ大規模な数量調査や携帯メールの送受信によって形成されるネットワークの構造という観点からの動的な分析を取り入れることで、「文法創発」現象の実証を目指す。

#### 参考文献

- Baxter, G., Blythe, R., Croft, W., & McKane, A. (2006). Utterance selection model of language change. *Physical Review E*, 73 (4), 46118.
- Beckner, C., Ellis, N., Blythe, R., Holland, J., Bybee, J., Ke, J., Christiansen, M., Larsen-Freeman, D., Croft, W., & Schoenemann, T. (2009). Language is a complex adaptive system: Position paper. *Language Learning*, 59 (supplement 1), 1–26.
- Enfield, N. (Ed.) (2002). *Ethnosyntax: Explorations in grammar and culture*. Oxford: Oxford University Press.
- Hopper, P. (1998). Emergent grammar. In M. Tomasello (Ed.), *The new psychology of language: Cognitive and functional approaches to language structure*, Vol. 1, 155–175. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 金水 敏 (2003). 『ヴァーチャル日本語: 役割語の謎』. 東京: 岩波書店.
- 久保田ひろい (2009). 制約から生まれる携帯コミュニケーションの構造. 『日本認知言語学会第10回全国大会ハンドブック』, p. 332.
- 久保田ひろい・石崎俊 (2009). 絵文字は何を伝えるか: 携帯メールにおける絵文字のパラ言語的振る舞い. 『日本認知科学会第26回大会発表論文集』, 108–111.
- 三宅 和子 (2005). 携帯メールの話しことばと書きことば. 『メディアとことば』, 2, 234–261.
- 太田 一郎 (2001). パソコン・メールとケータイ・メール: 「メールの型」からの分析 (特集 ケータイ・メール). 『日本語学』, 20 (12), 44–53.
- Port, R. (2010). Rich memory and distributed phonology. *Language Sciences*, 5, 43–55.
- Searle, J. (1970). *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 吉川 正人 (2010). 社会的圧力が形作る文法: 言語を社会知として見たとき何が言えるか. 『言語処理学会第16回年次大会 発表論文集』, 158–161.

---

<sup>2)</sup> 尤も、「キャラ語尾として(主として動物の)絵文字を用いる」というパターンは複数の利用者の絵文字使用に見られたため、かなり慣習化し共有された用法となっている可能性も指摘できる。